

高句麗古墳群江西大墓の再現

模写による壁画の保存

高句麗古墳群の壁画の一部はその保存のため、以前より手描きの模写が行われてきました。江西中墓を例に模写の歴史をみると、発掘当初に東京美術学校助教授であった小場恒吉が、照明設備もない環境で水彩絵具を使用し壁面ごとに模写をおこなっています。また、韓国の中央国立博物館には 1930 年代に水彩絵具と岩絵具を併用して描かれた模写が存在し、同様に北朝鮮の美術館にも水彩絵具などを使用して描かれたと思われる模写が存在します。その他に、北朝鮮では 1980 年代に高句麗壁画展に向けて大掛かりな模写事業が行われ、その時に描かれた模写は現在、東京都小平市にある朝鮮大学校に保管されています。2006 年には、日本における東洋絵画の模写教育を牽引してきた東京藝術大学大学院の保存修復日本画研究室が、壁画の質感を再現する当時の最先端模写技術を用いて江西中墓「朱雀」の現状模写ならびに復元模写を制作しています。

東京藝術大学大学院文化財保存学専攻保存修復日本画研究室では、同研究室による伝統的な絵画技法に裏打ちされた文化財の模写技術に、高度なデジタル画像処理技術や版画、印刷技術を融合させ、壁画文化財の同素材同質感の複製をより短期間で制作する特許技術の開発に成功しました。この文化財複製特許技術を用いて初めて制作した文化遺産が高句麗古墳群江西大墓「四神図」です。

文化財複製特許技術を用いた壁画の復元

東西南北に四神一（東）青龍・（南）朱雀・（西）白虎・（北）玄武が描かれた高句麗古墳群江西大墓の玄室を原寸大で再現するにあたり、これまでに描かれた模写を参考としながら、より精度の高い模写を制作するためには高精細画像が必要不可欠でした。そこで、高句麗会から平山郁夫（日本画家・東京藝術大学元学長）が譲り受けた、1980 年代に壁画を撮影したポジフィルムをもとに、さらに 2006 年に実施した江西大墓調査の際に撮影した写真を用いて、各壁面の原寸大高精細画像データを作成しました。その際には、石室内環境や経年劣化によって発生したと思われるシミや汚れのみを除去し、描かれた四神の鮮明な画像を甦らせました。また、裏打ちをして補強した和紙に白色顔料と花崗岩の粉末を混合した絵具で下塗りをし、岩の風合いがでるように凹凸をつけて花崗岩の上に描かれた壁画の質感を再現しました。その後、現地調査によって得られた色情報と質感情報をもとに、原寸大の壁画画像データの色補正処理を施し、こしらえた和紙にインクジェットプリンタを用いて図像を印刷しました。印刷した各壁面を組み上げた後、オリジナルと同材料の色材一緑青、朱、鉛白、黄土を用いて彩色し、玄室全体の雰囲気のみながら描き手の審美眼と感覚を大切にしながら絵画的な完成を目指して制作を進めました。



現地調査によって得られた色情報と質感情報を確認する



玄室全体の雰囲気のみながら描き手の審美眼と感覚で彩色する